

# 熊本—ソウル線全力応援プロジェクト



## グループ旅行助成

- 1 熊本—ソウル線を利用して海外へ旅行する10人以上の団体を対象に1人5,000円を助成します。
- 2 4月～6月のキャンペーン期間中、団体旅行（10人以上）を実施する県内の民間団体（※）は①の団体助成に加算して10人以上+3万円、20人以上+6万円、30人以上+10万円を助成します。※…協議会の構成団体の長から紹介を受けた団体に限る。
- 3 熊本—ソウル線を利用する3人以上のグループを対象に1人5,000円を助成します（旅行会社の特定の商品とセットになります）。

## 熊本—ソウル線のダイヤ

熊本⇒ソウル (OZ141)	月		木・土	
	発	着	発	着
	17:40	19:20	12:20	14:00
ソウル⇒熊本 (OZ142)	月		木・土	
	発	着	発	着
	15:10	16:40	09:50	11:20

(平成22年4月1日現在)

その他にも阿蘇くまもと空港国際線振興協議会では  
・『2010年韓国訪問の年』招待イベント  
・『世界大百済典』特別ツアー など多くの事業を行う予定です。

問い合わせ 阿蘇くまもと空港国際線振興協議会 ☎ (333) 2165

約500人の海外研修で得たものを無駄にしない  
平成2年「自ら考え自ら行う地域づくり事業」通称「ふるさと創生事業」により全国の市町村に1億円が交付されました。大津町はその交付金を人材育成のための町民海外研修などに使いました。平成2年から平成6年までの5年間に小中学校生、女性や高齢者の団体、農林業や商業関係従事者などの町民約500人が、ヨーロッパ、カナダ、中国など13カ国を訪れました。海外研修に参加した人たちが気づいたことは、「国際交流は人づくりである」ということでした。人づくりはまちづくりにつながります。この研修を無駄にしないためにも民間団体として「国際交流協会」を設立するべきだとの声研修参加者から出ました。

## 国際交流がもたらす心の豊かさとは—



Ozu International Exchange Organization since 1994

れ、85人のメンバーで活動を開始しました。その翌年、平成7年7月に大津町はアメリカネブラスカ州へイステイニングズ市との姉妹都市を締結し、町に国際交流の波がやってきました。大津町国際交流協会は行政組織ではなく、任意の民間団体です。町の人が自分たちでつくった団体は今年で16年目を迎えます。国際交流によって得られるものは？今後の協会が見つめていくものとは？会長の古荘輝幸さんに話を聞きました。

## 任意の民間団体が行った16年の活動 大津町国際交流協会

# その心に 新しい風を吹かせよう

町の外国人登録者は平成22年1月現在で143人。その中で日本以外のアジア人は116人。実に8割もの人たちがアジア人だ。取材を進めて、国際交流の重要性を更に感じたが、海外に行くことは簡単なことではない。しかし熊本—ソウル線を利用すれば90分で韓国に行くことができる。近くであるアジアなら一歩を踏み出すことが容易かもしれない。

海外に行つて自分が持っている価値観に変化が起こる。常に時代は移り、流れていく。「これはこうあるべきだ」などというものは時代とともに変わる。その価値観に新しい風を吹かすために、国際交流を行つてみるのも一つの手だろう。外国に行くだけで、その国の文化に触れることができる。それが交流になるのだから。

古荘会長は国際交流協会の活動をボランティアだと話し、町に還元したいと言った。わたしたちも国際交流を通して町のために動くことができるのではないだろうか？

大津町は、アジアに目を向けた事業を今年度から始め、アジアへの一歩を踏み出す。これからは、もっともっと空の向こうを眺めてみよう。明日の大津町のために。

特集 アジア元年 終

### きっかけは好奇心

仕事で6年間、アメリカのロサンゼルスに駐在していた古荘さんは、故郷である大津に帰ってきて、町のために何かしたいと考えた。「何かできることをしたかった。そんなときに広報で協会のことを知ったんです」以来、協会での活動を支え、平成19年からは笠博典前会長を引き継ぎ、会長を務める。

そして古荘さんは、国際交流は「好奇心」から始まると話す。他の国のことを知りたい…そんなきっかけから価値観が変わる。価値観の違いが分かれば、違うことも認めることができるし、共感することもできる。それは人生のなかで必要とされる要素だ。

### アジアに向けて ボランティアという意識

町の外国人登録者はアジアの人が8割を占める。今後の活動の活性化のためにも、アジアに向けた活動を多く行いたいと話す。

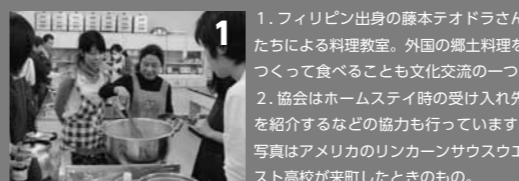
「町の在住外国人の皆さんも協会に入って欲しいですね。家族参加もできますので」そのような人がきっかけになれば更なる交流が進むことだろう。

町が行っている海外派遣ホームステイプログラムは、「旅行に行つて楽しかった」で終わることなく、国際交流で価値観の違いなどを知ることができ、人として成長する機会の場合だと古荘さんは考える。「町から補助を出してもらいながら海外に行くわけですから、自己に還元するだけではなく、他の人にも還元してほしいですね」。協会が、若い人たちがホームステイに参加したあとの受け皿としてあることを願う。

「協会はボランティアなんです。その意識が16年の活動の継続につながっていると思っています。今後もそのような意識を会員全員が持って活動していきたい」と協会の本質を話した。

## わたしたちが「受け皿」になりたい

大津町国際交流協会  
ふるそうてるゆき  
古荘輝幸 会長



1. フィリピン出身の藤本テオドラさんたちによる料理教室。外国の郷土料理をつかって食べることも文化交流の一つ。2. 協会はホームステイ時の受け入れ先を紹介するなどの協力も行っていきます。写真はアメリカのリンカーンサウスウエスト高校が来町したときのもの。

